正論

なぜ中国言論人を支援しないのか

東京大学教授
阿古　智子

5月2日、私は東京・有明のコンサートホールにいた。会場で聞こえる言葉はほぼ中国語だけ。スタッフも観客も中国語を話し、まるで中国にいるかのような錯覚に襲われた。5年間、中国大陸でコンサート活動を禁止されている李志という南京出身の歌手がハスキーボイスで歌い始めると、観客は大歓声を上げた。

李志のよく知られている楽曲には、1989年の天安門事件を想起させる「広場」や「人民には自由は必要ない」があるが、今回そうした曲は歌わなかった。中国当局と一定の約束をして出国と海外での公演を許されているのだろうか。一緒に行った中国の友人は、「今、中国で自由を望むことはできない。だから〝人民に自由は必要ない〟と言うこともできないのよ」と嘆いた。

言論統制は日本社会にも影響

李志のコンサートについて、中国の友人が書いた文章を私が日本語に翻訳し、先日FNN（フジニュースネットワーク）のウェブサイトで公開したところ、大きな反響があった。家族が中国にいる友人は匿名でしか書けなかった。

最近、私が海外で参加した会議には中国から芸術家、市民活動家、ジャーナリストらが来ていたが、皆、仮名で参加し、集合写真にも写らなかった。他の会議参加者も全て事前に登録し、許可証を持たない人が入らないよう制限し中国の参加者の安全を確保した。

言論統制は日本社会にも影響を与えている。中国人留学生は誰かに通報されることを恐れ、授業では発言せず、放課後にメールで私にコメントを送ってくる。東京で新型コロナ政策への抗議活動に参加した者は、一時帰国中に地元の警察に尋問された。

親や親戚、周りの友人たちは、この学生がなぜ抗議に参加したのかを理解しようとせず、悪いことをしたと彼を責め続けた。彼は人間不信に陥り、日本に戻ってからも学校に行かず、家に引きこもっている。誰かが自分の行動を監視していると思うと、緊張して他人と話ができないのだという。

博士論文の執筆のためにインタビューした人たちが逮捕されたという学生もいる。政治に直接関わるようなテーマを扱っていなかったにもかかわらずだ。

中国への留学を考えていた日本人学生は、ビザの申請で家族の個人情報まで詳細に提出する必要があること、中国入国時にパソコンや携帯電話の検査が行われる可能性があることを知り、留学を断念した。

自由を求めて日本に移住

言論空間が厳しく統制され、中国では検閲によって大量の重要な情報やコメントが削除されている。書籍や雑誌の出版、音楽や芸術の活動にもさまざまな制限が課されるようになった。そのような中で、自由が制限される中国の環境から逃れ、海外に移住する人が増えている。

昨今の中国人の海外移住は「潤」とも表現されるが、それは「潤」の中国語の発音が〝run〟で「脱出」という意味合いを込めているからだ。日本にも中国人移住者が増えており、中国語書籍を扱う書店が都内にいくつも開店し、李志のようなアーティストの公演が日本でも行われるようになった。今月中旬には1万人収容できる会場で中国では制限されている人気トークショーが行われる。

中国の友人はこのような動きを「自由経済」（フリーダムエコノミー）と表現する。つまり、自由を求める中国人の活動が、海外で経済効果を生んでいるということである。日本に脱出してきた中国人コミュニティによる一定のマーケットが生まれており、日本経済を押し上げる要因となっている。この実態を日本の政治家はどう捉えているのか。

清末にはほど遠い今の日本

中国人が自由を求めて日本に押し寄せている状況を見て、「今は清末の日本に近い状態ではないか」という人もいる。日本が、表現の自由を享受できる空間を一定程度、提供できているという意味ではそうなのかもしれない。

でも、何かが違う。そう、今の日本に孫文などに多額の資金援助をし、辛亥革命の成就に寄与した梅屋庄吉のような実業家はいるだろうか。

当然、そのようなことをしようものなら、中国の共産党政権を転覆しようとしたと思われかねない。外国の政治に直接介入する必要はないし、そうすることは適切ではないだろう。そうではなく、私が問いたいのは、私たちは短期的な視野でしか、自らの国や企業の利益を考えていないのではないかということだ。

中国と向き合う際に、日本が重視すべき価値が明確にできないのなら、日本が戦後努力して築いてきた民主主義と自由を保障する環境は確実に衰退していく。

志のある中国人の言論や表現活動を積極的に支援しようとする気概のある政治家も知識人も、企業も民間団体も、今の日本にはほとんど見受けられない。

そんな状況を前に、私は日本という国の衰えを切実に感じている。

（あこ　ともこ）